



CONTENTS

◆研究科長より

- ・新入生の皆さんへ 1
- ・世界トップ1%高被引用論文分野別一覧 3

◆学内行事

- ・教授就任挨拶 5
- ・教授退職挨拶 6

◆学術・教育・一般

- ・連携研究センターシンポジウムを開催して 10
- ・寄附講座紹介「眼循環代謝学」 11
- ・医学研究科・医学部医学科
「優秀研究賞」、「優秀論文賞」について 12
- ・優秀研究賞を受賞して 12
- ・優秀論文賞を受賞して 12
- ・香港大学李嘉誠医学院学生交流派遣留学報告書 15
- ・第52回東医体スキー競技
男子総合6連覇の御報告 16

◆お知らせ

- ・フラテ祭2010開催について 17
- ・第104回 医師国家試験合格状況 17
- ・平成22年度 大学院入学状況 17
- ・平成22年度 医学部医学科入学状況 18
- ・平成21年度 大学院学位授与状況 18
- ・医学部医学科科学士学位記伝達式 18
- ・平成21年度 各種助成の採択状況 19

◆事務部から

- ・医学部創立90周年記念事業募金活動 20
- ・寄附金納入状況 20
- ・ご寄附いただいた法人・企業・団体等 21
- ・教員寄附者のご芳名 22

- 広報室便り13・編集後記 23

1 研究科長より

新入生の皆さんへ

安田和則 北海道大学大学院医学研究科長・医学部長



新入生の皆さん、北海道大学医学部への入学、おめでとう。教職員一同を代表してお祝いを申し上げますとともに、皆さんを心から歓迎します。医学にはいろいろな領域がありますが、あらゆる医学の最終目標は、直接または間接に病める人を救

うこと、あるいは健康という人間の基本的な人権を守ることにあります。皆さんはその最終目標に向かって、本日から医学の道を歩み始めます。医学の道は、一生にわたっ

て勉学を続けなければならない厳しい道です。しかし、その傍らにはいつも大きな喜びがあり、大変遣り甲斐のある道です。迷わずにこの道を進んでください。

医学の道を歩む者は、その一生をかけて2つの資質を育まねばなりません。その第一は「心」です。医師は病める人の心の痛みを理解し包容できる大きな心、そしてどのような状況にも動じない静かな心を持たねばなりません。皆さんはこの6年間に、多くの書を読み、友や先輩と語り、そして自分の人生を真剣に考えることによって、人としての大きな器を陶冶してください。今後、1年半にわたって皆さんが受ける全学教育も、この見地から行なわれます。この時期は人文・社会科学にも目を向け、人生を学んでください。育むべき資質の第二は、常

識的思考を疑うことのできる批判力と、正解がない問題に対して解答を与えることができる応用力です。昨今、報道される誤診や治療過誤の多くは、これらの欠如に起因します。批判力と応用力を身に付けるためには、まず基礎医学に関する正確な知識を修得し、その上で、それに裏打ちされた臨床医学的知識を学ぶことが必要です。医学部の専門教育はこの順序で構成されています。最近、臨床にすぐ役に立つ実用的知識のみを学びたいと希望し、基礎医学を軽視する学生がいます。しかしその程度のマニュアル的知識で人を治せるものではありません。すぐに誤診や治療過誤を起こしてしまうでしょう。一見、臨床からは遠いと感じられる基礎医学を勉強するのは、それが臨床医学の正しい理解に必須であるからであり、さらに最終的に、医学の道を歩む者にとって必須の批判力と応用力を身に付けるためなのです。最近、医師国家試験の問題が改良され、この批判力と応用力を問う良問が多くなってきました。基礎医学をしっかり学び、それに基づいて病態の本質を考えるような臨床実習を行わなければ合格できないという方向へ、医師国家試験が進歩しているのは至極当然のことです。医学部6年間で学べる知識は、最終的に医師として必要な知識に比べれば、ほんの一部です。しかし何もあせる必要はありません。医学部で講義される科目を、一つ一つ確実に、そしてできるだけ深く学んでいけば良いのです。皆さんは、マニュアルに頼って、唯一つの正解を探すというような勉強の仕方ではなく、自ら調べた広範な情報の中から複数の正解候補を探し、その中で最善を決定するという考え方を早く身に付け、学生のうちから批判力や応用力を養ってください。

大学と高校との勉強の仕方の違いについて、もう一言、述べたいと思います。高校では全員が同じ範囲を勉強し、勉強方法についても指導を受け、しかも問題には必ず正解がありました。大学における勉強の範囲は人によって不定かつ無限であり、正解もしばしば存在しません。したがって大学では、自分で能動的に勉強する必要があり、学びの到達レベルも人によって異なります。医学部のカリキュラムで教えるものは、医学生としての基本的知識です。余力のある皆さんは、高校生時のように「教室で講義を受けてさえおれば、すべての知識は受動的に与えられる」と考えるのではなく、教室を出て自ら能動的にさらに深く勉強してください。何も難しいことはありません。具体的には、その講義や実習をしてくれた先生の部屋を、昼休みや放課後にでも訪問してみてください。遊びに行くといった感覚で結構です。質問をしたり、参考書を紹介してもらったりしてください。慣れたらその先生の分野の勉強会に参加したり、実験を手伝ったりできるかもしれません。医学部には49の分野がありますが、どの分野の先生も皆さんを歓迎するでしょう。何に

でも興味を持ち、それを深めようとするのは、大学生として大変重要なことです。そのようなカリキュラムにはない勉強や経験が、皆さんの医学生時代をより充実させ、あるいはその後の人生に大きな影響を与えるでしょう。

皆さんが持つべき将来の目標に関して、一言申し上げます。6年後に皆さんを待ち受ける卒業試験や医師国家試験は、本日の入学式がそうであるように、皆さんの人生の一通過点であって、ゴールではありません。それらは易しいものではありませんが、皆さんが普通に勉強しさえすれば乗り越えられないはずがありません。北海道大学医学部に入学した皆さんには、国民から負託されたもっと大きな使命があることを忘れないでください。それは皆さんが日本の医学・医療の様々な領域で、研究医あるいは専門医として次の時代を担い、その次の世代を指導することです。現在、世界最高レベルにある日本の医療は、時代を超えて粛々とこの使命を果たしてきた多くの先輩によって、営々と築かれてきたものです。皆さんはこれから、この使命を果たしている多くの先輩に出会い、指導を受け、そして立派な医師に育っていくでしょう。その次は皆さんの番です。将来、皆さんがこの使命を果たしてください。医学が高度に複雑化した現在、医学教育の最終教育課程は学士課程ではなく、大学院博士課程です。北大医学部卒業生の多くは、卒業後の研修の一時期において大学院博士課程に進み、「研究」という批判と論理の世界を経験して批判力と応用力を身に付け、先程述べた使命を果たす実力を養っています。北大医学部では全国に先駆けて、学部と大学院をつなぐMD-PhDコースを設けていますので、興味のある人は近い将来に我々に聞いてほしいと思います。皆さんには大きな無限の将来があります。視野を広げ、将来に対する大きな夢を持ってください。将来にその夢を実現するために、今何が必要かを考え、それを学生時代に身に付けるべきです。私が学生に贈り続けている、20世紀初頭の思想家ジェームズ・アレンの言葉を皆さんにも贈りたいと思います。「気高い夢を見なさい。あなたは、あなたが夢見た者になるだろう。あなたの夢は、やがてあなたが何になるかの予言である。」

最後に、私は皆さんの全員が、病に苦しむ人を救うため、例えそれがどんなに大変な道であっても乗り越える覚悟を持ってこの医学の道を志したと信じます。皆さんは自分が卒業するために医学を勉強するものではありません。将来、皆さんの治療を受ける病める人々のために勉強するのです。それには、「進級さえできればよい。卒業さえできればよい。」というような勉強の仕方では良いはずがありません。将来に皆さんの治療を受ける人、それは皆さんの両親や子供であるかも知れません。皆さん

が今、決意しているその初心を忘れることなく、この自然豊かな北大のキャンパスで思う存分勉学に励んでいただき、健康には十分に留意して心身を鍛え、6年後にこ

こにいる全員がそろって医学部を卒業して医師となることを心から祈念します。

(平成22年度北海道大学医学部入学式告辞より)

世界トップ1%高被引用論文分野別一覧

安田 和 則 北海道大学医学部長

1 : CLINICAL MEDICINE

- 1 Miyakis S, Lockshin MD, Atsumi T, Branch DW, Brey RL, Cervera R, Derksen RHWM, De Groot PG, Koike T, Meroni PL, Reber G, Shoenfeld Y, Tincani A, Vlachoyiannopoulos PG, Kritis SA: International consensus statement on an update of the classification criteria for definite antiphospholipid syndrome (APS). **J Thromb Haemost** 4: 295-306 2006. Citations: 461
- 2 Onishi H, Araki T, Shirato H, Nagata Y, Hiraoka M, Gomi K, Yamashita T, Niibe Y, Karasawa K, Hayakawa K, Takai Y, Kimura T, Hirokawa Y, Takeda A, Ouchi A, Hareyama M, Kokubo M, Hara R, Itami J, Yamada K: Stereotactic hypofractionated high-dose irradiation for stage I nonsmall cell lung carcinoma: Clinical outcomes in 245 subjects in a Japanese multiinstitutional study. **Cancer** 101: 1623-1631 2004. Citations: 153
- 3 Hayashi T, Beck L, Rossetto C, Gong X, Takikawa O, Takabayashi K, Broide DH, Carson DA, Raz E: Inhibition of experimental asthma by indoleamine 2,3-dioxygenase. **J Clin Invest** 114: 270-279 2004. Citations: 143
- 4 Nishimura EK, Granter SR, Fisher DE: Mechanisms of hair graying: Incomplete melanocyte stem cell maintenance in the niche. **Science** 307: 720-724 2005. Citations: 141
- 5 Todo S, Furukawa H: Living donor liver transplantation for adult patients with hepatocellular carcinoma: Experience in Japan. **Ann Surg** 240: 451-459 2004. Citations: 132
- 6 Hatakeyama M: Oncogenic mechanisms of the helicobacter pylori CagA protein. **Nat Rev Cancer** 4: 688-694 2004. Citations: 130
- 7 Yasuda K, Kondo E, Ichiyama H, Kitamura N, Tanabe Y, Tohyama H, Minami A: Anatomic reconstruction of the anteromedial and posterolateral bundles of the anterior cruciate ligament using hamstring tendon grafts. **Arthroscopy** 20: 1015-1025 2004. Citations: 112
- 8 Aoyama H, Shirato H, Tago M, Nakagawa K, Toyoda T, Hatano K, Kenjyo M, Oya N, Hirota S, Shioura H, Kunieda E, Inomata T, Hayakawa K, Katoh N, Kobashi G: Stereotactic radiosurgery plus whole-brain radiation therapy vs stereotactic radiosurgery alone for treatment of brain metastases: A randomized controlled trial. **J Am Med Assn** 295: 2483-2491 2006. Citations: 109
- 9 Ma XM, Endo R, Ishiguro N, Ebihara T, Ishiko H, Ariga T, Kikuta H: Detection of human bocavirus in Japanese children with lower respiratory tract infections. **J Clin Microbiol** 44: 1132-1134 2006. Citations: 99
- 10 Nakamura H, Arakawa K, Itakura H, Kitabatake A, Goto Y, Toyota T, Nakaya N, Nishimoto S, Muranaka M, Yamamoto A, Mizuno K, Ohashi Y: Primary prevention of cardiovascular disease with pravastatin in Japan (MEGA Study): A prospective randomised controlled trial. **Lancet** 368: 1155-1163 2006. Citations: 92
- 11 Yasuda K, Kondo E, Ichiyama H, Tanabe Y, Tohyama H: Clinical evaluation of anatomic double-bundle anterior cruciate ligament reconstruction procedure using hamstring tendon grafts: Comparisons among 3 different procedures. **Arthroscopy** 22: 240-251 2006. Citations: 83
- 12 Asahina H, Yamazaki K, Kinoshita I, Sukoh N, Harada M, Yokouchi H, Ishida T, Ogura S, Kojima T, Okamoto Y, Fujita Y, Dosaka-Akita H, Isobe H, Nishimura M: A phase II trial of gefitinib as first-line therapy for advanced non-small cell lung cancer with epidermal growth factor receptor mutations. **Brit J Cancer** 95: 998-1004 2006. Citations: 74
- 13 Minegishi Y, Saito M, Tsuchiya S, Tsuge I, Takada H, Hara T, Kawamura N, Ariga T, Pasic S, Stojkovic O, Metin A, Karasuyama H: Dominant-negative mutations in the DNA-binding domain of STAT3 cause hyper-IgE syndrome. **Nature** 448: 1058-U10 2007. Citations: 68
- 14 Nomura T, Sandilands A, Akiyama M, Liao HH, Evans AT, Sakai K, Ota M, Sugiura H, Yamamoto K, Sato H, Palmer CNA, Smith FJD, McLean WHI, Shimizu H: Unique mutations in the filaggrin gene in Japanese patients with ichthyosis vulgaris and atopic dermatitis. **J Allerg Clin Immunol** 119: 434-440 2007. Citations: 56
- 15 Saadat I, Higashi H, Obuse C, Umeda M, Murata-Kamiya N, Saito Y, Lu HS, Ohnishi N, Azuma T, Suzuki A, Ohno S, Hatakeyama M: Helicobacter pylori CagA targets PARI/MARK kinase to disrupt epithelial cell polarity. **Nature** 447: 330-U8 2007. Citations: 52
- 16 Sfrikakis PP, Markomichelakis N, Alpsy E, Assaad-Khalil S, Bodaghi B, Gul A, Ohno S, Pipitone N, Schirmer M, Stanford M, Wechsler B, Zouboulis C, Kaklamanis P, Yazici H: Anti-TNF therapy in the management of Behcet's disease: Review and basis for recommendations.

Rheumatology 46: 736-741 2007. Citations: 44

- 17 Fukase K, Kato M, Kikuchi S, Inoue K, Uemura N, Okamoto S, Terao S, Amagai K, Hayashi S, Asaka M: Effect of eradication of helicobacter pylori on incidence of metachronous gastric carcinoma after endoscopic resection of early gastric cancer: an open-label, randomised controlled trial. **Lancet** 372: 392-397 2008. Citations: 30
- 18 Miller EJ, Li J, Leng L, McDonald C, Atsumi T, Bucala R, Young LH: Macrophage migration inhibitory factor stimulates AMP-activated protein kinase in the ischaemic heart. **Nature** 451: 578-U9 2008. Citations: 22
- 19 Ohnishi N, Yuasa H, Tanaka S, Sawa H, Miura M, Matsui A, Higashi H, Musashi M, Iwabuchi K, Suzuki M, Yamada G, Azuma T, Hatakeyama M: Transgenic expression of helicobacter pylori CagA induces gastrointestinal and hematopoietic neoplasms in mouse. **Proc Nat Acad Sci USA** 105: 1003-1008 2008. Citations: 22
- 20 Nomura T, Akiyama M, Sandilands A, Nemoto-Hasebe I, Sakai K, Nagasaki A, Ota M, Hata H, Evans AT, Palmer CNA, Shimizu H, McLean WHI: Specific filaggrin mutations cause ichthyosis vulgaris and are significantly associated with atopic dermatitis in Japan. **J Invest Dermatol** 128: 1436-1441 2008. Citations: 20
- 21 Takeuchi T, Tatsuki Y, Nogami Y, Ishiguro N, Tanaka Y, Yamanaka H, Kamatani N, Harigai M, Ryu J, Inoue K, Kondo H, Inokuma S, Ochi T, Koike T: Postmarketing surveillance of the safety profile of infliximab in 5000 Japanese patients with rheumatoid arthritis. **Ann Rheum Dis** 67: 189-194 2008. Citations: 19
- 22 Nemoto-Hasebe I, Akiyama M, Nomura T, Sandilands A, McLean WHI, Shimizu H: Clinical severity correlates with impaired barrier in filaggrin-related eczema. **J Invest Dermatol** 129: 682-689 2009. Citations: 6
- 23 Kunishima S, Kobayashi R, Itoh TJ, Hamaguchi M, Saito H: Mutation of the beta 1-tubulin gene associated with congenital macrothrombocytopenia affecting microtubule assembly. **Blood** 113: 458-461 2009. Citations: 4

2 : BIOLOGY&BIOCHEMISTRY

- 1 Ishii I, Fukushima N, Ye XQ, Chun J: Lysophospholipid receptors: Signaling and biology. **Annu Rev Biochem** 73: 321-354 2004. Citations: 213
- 2 Kano M, Ohno-Shosaku T, Hashimotodani Y, Uchigashima M, Watanabe M: Endocannabinoid-mediated control of synaptic transmission. **Physiol Rev** 89: 309-380 2009. Citations: 7

3 : PHYSICS

- 1 Sharp GC, Jiang SB, Shimizu S, Shirato H: Prediction of respiratory tumour motion for real-time image-

guided radiotherapy. **Phys Med Biol** 49: 425-440 2004. Citations: 81

4 : MOLECULAR BIOLOGY&GENETICS

- 1 Holland LZ, Albalat R, Azumi K, Benito-Gutierrez E, Blow MJ, Bronner-Fraser M, Brunet F, Butts T, Candiani S, Dishaw LJ, Ferrier DEK, Garcia-Fernandez J, Gibson-Brown JJ, Gissi C, Godzik A, Hallbook F, Hirose D, Hosomichi K, Ikuta T, Inoko H, Kasahara M, Kasamatsu J, Kawashima T, Kimura A, Kobayashi M, Kozmik Z, Kubokawa K, Laudet V, Litman GW, McHardy AC, Meulemans D, Nonaka M, Olinski RP, Pancer Z, Pennacchio LA, Pestarino M, Rast JP, Rigoutsos I, Robinson-Rechavi M, Roch G, Saiga H, Sasakura Y, Satake M, Satou Y, Schubert M, Sherwood N, Shiina T, Takatori N, Tello J, Vopalensky P, Wada S, Xu AL, Ye YZ, Yoshida K, Yoshizaki F, Yu JK, Zhang Q, Zmasek CM, de Jong PJ, Osoegawa K, Putnam NH, Rokhsar DS, Satoh N, Holland PWH: The amphioxus genome illuminates vertebrate origins and cephalochordate biology. **Genome Res** 18: 1100-1111 2008. Citations: 40

5 : NEUROSCIENCE&BEHAVIOR

- 1 Kawamura Y, Fukaya M, Maejima T, Yoshida T, Miura E, Watanabe M, Ohno-Shosaku T, Kano M: The CB1 cannabinoid receptor is the major cannabinoid receptor at excitatory presynaptic sites in the hippocampus and cerebellum. **J Neurosci** 26: 2991-3001 2006. Citations: 83
- 2 Uchigashima M, Narushima M, Fukaya M, Katona I, Kano M, Watanabe M: Subcellular arrangement of molecules for 2-arachidonoyl-glycerol-mediated retrograde signaling and its physiological contribution to synaptic modulation in the striatum. **J Neurosci** 27: 3663-3676 2007. Citations: 60
- 3 Ziskin JL, Nishiyama A, Rubio M, Fukaya M, Bergles DE: Vesicular release of glutamate from unmyelinated axons in white matter. **Nat Neurosci** 10: 321-330 2007. Citations: 54

6 : IMMUNOLOGY

- 1 Takaoka A, Wang Z, Choi MK, Yanai H, Negishi H, Ban T, Lu Y, Miyagishi M, Kodama T, Honda K, Ohba Y, Taniguchi T: DAI (DLM-1/ZBP1) is a cytosolic DNA sensor and an activator of innate immune response. **Nature** 448: 501-U14 2007. Citations: 175
- 2 Goto M, Murakawa M, Kadoshima-Yamaoka K, Tanaka Y, Nagahira K, Fukuda Y, Nishimura T: Murine NKT cells produce Th17 cytokine interleukin-22. **Cell Immunol** 254: 81-84 2009. Citations: 6

7 : PHARMACOLOGY&TOXICOLOGY

- 1 Matsumoto M, Seya T: TLR3: Interferon induction by double-stranded RNA including poly (I:C). **Advan Drug Delivery Rev** 60: 805-812 2008. Citations: 25

2 学内行事

教授就任挨拶

就任のご挨拶

宝 金 清 博 神経外科学分野 教授



輝かしい歴史と伝統を持つ北海道大学神経外科の第4代目の教授の任を拝命いたしました。9年の期間を置いて、再び、母校で働かせていただく機会に恵まれたことに、改めて、感謝申し上げます。当教室は、診療開始から50年余りを経過し、講座開設から教えても、もう間もなく半世紀を迎えようとしております。これまでに、多くの脳外科医を輩出し、北海道は言うまでもなく、国内、国外で活躍されておられます。

こうしたこれまでの業績、社会貢献は、この教室を現に支えるものにとっては、大きな誇りであります。しかし、また、教室の「今」を担う者にとっては、非常に重いものでもあります。

私は、札幌医科大学脳神経外科という国内で最も伝統のある教室の主任教授の公職を8年4ヶ月拝命いたしました。従って、主任教授を二回経験することになりました。これは、いろいろなめぐり合わせの結果ではありますが、私自身は、私に与えられた大きな試練であると認識しております。

私は、2本目のスタートラインに立っている短距離のスピードスケートの選手、あるいは、二本目のスタートに立ったジャンパーに自分を重ねております。ご存知のように、500メートルのスピードスケートでは、インサイドスタートとアウトサイドスタートがあり、これを平均化するために、一本目と二本目の2回の競技が行われます。スキーのジャンプも同様に自然条件の影響を最小限にするために、2本の合計で競技されます。そして、一本目の成績が上位であるにも関わらず二本目で失敗するアスリートは少なくありません。

9年間、札幌医科大学脳神経外科で、全力疾走して参りました。臨床研修制度の導入に期を一にしており、こ

の約9年間は、大きな逆風の中を必死にもがいてきたように思います。周りからはそのようには評価していただけかもしれませんが、自分としては、力いっぱいの一本目を滑り終えた感があります。力をセーブすることなく、毎日を全力で過ごして参りました。力足りず、十分な実績を残すことは叶いませんでしたし、本来の任期半ばにして、移動となったことには、複雑な思いがあります。

私は、2本目のスタートに立っております。一本目は、逆風の中ではありませんでしたが、良き環境、仲間にも恵まれ、目標のいくつかは達成することができました。二本目は、一本目での教訓や成功体験が十分に生かされるべきだと思います。とは言え、この話をスポーツ競技に例えたのは、二本目が一本目よりよいタイムや飛距離となる保障は全くないということです。それどころか、年齢を重ねてきた、あるいは経験を重ねてきたことによる、ある種の怠惰と先が見えてしまうことにより、二本目の成績が一本目を大きく下回る可能性はないとは言えません。

しかし、この職責をいただいた以上、一本目と同じように精一杯の力を発揮することは私に課せられた責務であると強く自覚しております。また、総合成績で評価されると考えており、北海道大学神経外科のためだけという狭い価値観ではなく、少しでも高い見地から後世評価されるような仕事を目標にしております。

10年弱の期間は、私にはちょうど良い長さと思っております。多少、単独暴走する傾向がありますので、緩急をつけて、皆さんが納得していただけるようなスピードで二本目に挑みたいと思っております。スピードスケートやジャンプとの決定的な違いは、共に進む仲間や先輩諸氏、そして、後につながる後輩がいるということです。皆様のご協力とご指導、ご支援なしには、期間の長短、一本目、二本目の如何に関わらず、目標実現は不可能であることは、間違いありません。どうか、大学関係者、医学部諸兄の皆様の暖かいご支援をよろしく願いいたします。

教授退職挨拶

定年退職によせて－悔いの無い33年間

本 間 研 一 時間生理学分野 教授



私が大学院を修了して医学部助手になったのが1977年4月のことで、定年退職まで33年間医学部教員を務めました。私は1965年に北大に入学し、卒業後2年間北大病院精神神経科で研修を受けていますので、それらの期間を含めると45年間北大

キャンパスで過ごしたことになります。私が北大に入学した頃は日本中が「岩戸景気」と東京オリンピックの準備で湧きかえっていました。学生時代前半はクラブ活動に熱中するなど比較的穏やかな日々でしたが、学部3年（現在の5年生）になって大学闘争に曝され、人間としての主体性を問われる日々でした。基礎医学に進んでからは研究三昧に明け暮れ、医学部以外の研究者や外国研究者との交流が新鮮でした。助教授になってからは、前任の廣重力教授が教務主任や動物実験施設長、医学部長を歴任するなど医学部の管理運営面で多忙となったこともあって、大学院生の指導に多くの時間を割きました。

北大医学部における大きな思い出の1つは北大学長選挙で、当時医学部長であった廣重教授を学長にと医学部の助教授、講師クラスの若手教官が結集し、選挙運動を行いました。加藤紘之名誉教授（元病院長）、杉原平樹名誉教授（元病院長）、福島菊郎名誉教授（生理学第二講座）と私の4人が音頭を取り、それぞれ研究も診療も放り投げて運動に没頭しました。当時の教授会からは跳ね上がりの連中と思われていたかもしれません。しかしその甲斐があつてか、それまでは何時も2位か3位だった医学部出身の学長候補が50年ぶりに学長に当選しました。

私が教授になった1990年代初頭は、政策により国立大学が大きく変わり始める時期でした。東大を除く全国の大学もそうでしたが、北大でも教養部が廃止され、学部一貫教育が導入されました。私は教養時代に医学以外の学問に触れ、大いに触発された経験を持っていたので、この改革には積極的にはなれませんでした。現在、少子化が進み大学全入時代になって教養部の必要性が再び唱えられています。この頃の思い出は、後に副学長になった解剖学第一講座の井上芳郎教授とともに講座の垣根を越えた医学部内研究交流組織「ニューロサイエンス談話会」を立ち上げたことです。第1回の会合は医学部図書館3階の特別会議室で行われましたが、珍しさもあって

か80名を超える聴衆が集まりました。談話会は現在も続いており、今年中には100回を超えるものと思われます。その後、この談話会のメンバーが核となって文部科学省から大型予算を獲得し、北海道大学脳科学研究教育センターを設立しました。初代のセンター長は井上芳郎先生で、現在は私が引き継いでおります。

21世紀に入る直前に医学部の大学院重点化がありました。これは、教授会で某教授が「黒船が来た」と発言したほどの衝撃を与えるものでした。今考えると膨大なエネルギーをかけた割には、教官の負担ばかりが増える改革でしたが、医歯学総合研究棟の新設など、恩恵にも授かりました。この頃、老朽化狭小化した医学研究科・医学部の再開発計が構想されました。私は、医学部再開発検討専門委員会の委員長に任命され、新しい研究棟の建設に向けて議論を開始しましたが、その直後に、国の予算の関係で建物の新営は認められず、耐震改修の名目で整備を行うことになりました。医学研究科耐震改修5カ年計画を作成し、南研究棟から始め順次北に移る計画を立てましたが、改修中も研究教育に支障がないよう時系列を考慮した分野配置は細心の注意を払いました。教授会が協力的だったせいか、お国変えにもそれほど異論は出ませんでした。それまで東北棟の1階にあった生協食堂や地下にあった学生サークル室の移転もこの委員会で決められました。私が研究科長、医学部長になってからも耐震改修は続きましたが、途中で概算要求が認められず、年次進行の改修が中断するという事態が起きました。そこで、医学研究科で眠っている委任経理金を用いて自力で改修を進めることにしました。この時、北大当局からも15%の間接経費上納分を5年間10%にまけてもらい、工事費の足しにしました。

私が研究科長になる直前に「名義貸し問題」が発生し、北大医学部はマスコミのバッシングにあって、意気消沈していました。また、法人化された国立大学は従来の護送船団型から独立独歩型への転換が求められていました。そこで、研究科長になってから、北大医学研究科・医学部の基盤を固める目的で2つの事業を立ち上げました。1つは、大型プロジェクト研究費の受け皿となる連携研究センター・フラテの設置で、もう1つは医学部創立90周年記念事業です。記念事業の目玉としては、学友会館・フラテの建設を計画しました。連携研究センターでは、2006年から連続して大型研究プロジェクト「未来創薬医療イノベーション拠点形成」、「オール北海道先進医学医療拠点形成」、「先端光イメージング研究拠点プログラム」が採択され、目論見は見事に当たりました。

学友会館の建設は、緊急性が低いとの理由で後回しにされていた図書館と管理棟の耐震改修工事も兼ねることになり、医学部創立100周年に向けての助走路となるものでした。リーマンブラザーズ・ショックもあって、当初目論んでいた10億円の寄付は途中で5億に減額しましたが、北大当局の支援もあって2010年の6月には竣工予定です。それに先立ち、図書館と管理棟の改修工事は終了しました。再開発検討専門委員会で基本計画が策定されてからほぼ10年の歳月が経ち、残すは附属動物実験施設のみとなりました。余談ですが、新しい管理棟の正面デザインは私のアイディアで、古い医学部本部の正面玄関をイメージしながら近代感を出しています。評判はそれほど悪くはないようです。

先日、国立大学法人6年間の中期評価が発表されまし

た。北大は上から1/4位のところにあります。評価基準がはっきりしないので何とも言えませんが、北大における医学研究科・医学部は、少なくとも研究においては、発表論文数、論文引用数、競争的資金獲得などにおいて断然トップを走っています。この勢いを今後も持続するとともに、教育面においても他の追従を許さないような成果を上げて頂きたいと思います。私の研究科長としての最後の仕事になった教育助教制度が初期の目的を達成することを期待しています。

今後、私は寄付講座「時間医学講座」（医歯学総合研究棟）の特任教授として、しばらく研究を続けることになりました。また、北大脳科学研究教育センターのセンター長を後1年努めさせて頂きます。今後ともよろしくお願い致します。

退職にあたって

岸 玲子 公衆衛生学分野 教授



1997年の9月、今から12年前に母校の出身教室に戻り教授になりました。振り返りますと、やりがいにはありましたが厳しい日々でもありました。詳しいことはフラテに書かせていただきましたが厳しかった理由は札幌医大に比べると実に半

分の少ないスタッフで、学部教育・院生教育、さらには身に余る社会的活動を引き受けざるをえなかったためです。やりがいがあったのは、もちろん教育です。教育は学生さんと教員の双方向の関係ですのでいつももっと工夫をと考えながらだっように思っています。

私はハーバード大学公衆衛生大学院で専門の学位を得ていますが、本学に戻った翌年すぐに「社会と健康」という大学院共通講義のシリーズを開講しました。北大では未だ公衆衛生大学院は実現していませんが、現在は多くの部局の先生がたの協力を得て、社会と健康（IからV）で、20科目、単位数も40単位近くになっています。本学は総合大学ですので、公衆衛生大学院を作るニーズが高いのだと思います。既に京都大・九大・東大・大阪大・筑波大ではMPHを出していますので、北大もぜひ、遅くない時期に専門のdegreeを出すコースができるように願っています。

研究面では主として次の5つの分野の仕事をしてきました。

- ①環境と子どもの健康に関する北海道スタディでは、環境化学物質に対して最も感受性の高い乳幼児期や胎児期の曝露によってアレルギーや行動障害など近年非常に増加している小児疾患が引き起こされるのかどうか？普通の妊婦が曝露するレベルでの胎児期からの曝露に焦点をあて、行ってきました。約2万人の前向きコホートで、環境省が平成22年から開始する「環境と子どもの健康（エコチル調査）」のモデルになった研究です。この仕事で日本医師会医学賞を2009年にいただきました。
- ②シックハウス症候群の実態と原因解明のための疫学研究で、全国において、統一プロトコルを用いた前向き研究を実施し、発症要因の解明ならびに対応方策を提案するための研究を行いました。プラスチック可塑剤由来のフタル酸エステル類、難燃剤有機リン化合物、微生物由来のMicrobial Volatile Organic Compoundsなどこれまでほとんど検討されてこなかった室内汚染物質とシックハウス症状との関連を明らかにして専門家向けマニュアルを出版できました。
- ③労働者のストレスと循環器疾患・メタボリック症候群予防に関する研究は 予防介入が可能な危険因子である喫煙、肥満、高血圧、耐糖能異常、低HDL血症、不眠、抑鬱などの要因に対して職場のストレスを含めた各危険因子がどのように循環器疾患やメタボリック症候群発症に関係しているかを自治体職員10000人を対象に疫学的に明らかにしてきました。
- ④社会的サポートネットワークと高齢者の健康に関する研究で、高齢者をめぐる社会的サポートネット

ワークと種々の健康指標（日々の活動性、抑うつ、早期死亡、要介護状態、医療費など）の関連について前向き研究で検討し、最近「認知機能低下」予防に関する無作為化介入研究も行っています。

⑤職場の潜在的な神経障害に関する疫学および実験研究は、有機溶剤曝露労働者について神経行動テストバッテリーを用いて、低濃度曝露レベルでも潜在的な障害を引き起こす可能性が高いことを見出し、日本・アメリカなどの許容濃度を下げることができました。

このような教育・研究を行いながら政府機関や地域で公職（日本学術会議会員や、厚生労働省食品衛生審議会会長など）をこなしてきました。振り返りますと、北海道大学では実に多くの皆様のお世話になりました。改めて心より感謝申し上げます。

なお4月1日から北海道大学に環境健康科学研究教育センターができることになり、そのセンター長（特任教授）で、まだしばらく北海道大学のために微力を傾けることになりました。環境と健康は、21世紀の社会にとって重要な課題ですので国民の関心も高い領域です。これまでの経験を生かして努力してまいりますので、今後ともお力添えをよろしくお願い致します。

退職によせて

前 沢 政 次 医療システム学分野 教授



仕事に区切りをつけるのはよいことである。13年11か月。過ぎてしまえば、脳裡をかすめる閃光に過ぎない日々。

いろいろな経験をさせてもらい、さまざまな方々にお世話になった。

平成8年3月の医学部教授会で附属病院総合診療部教授として選考していただいた。自分の人生にとっては奇跡のようなものである。北大は旧帝大である。私は旧六の出身である。しかも、8年間農村医療の現場にいた。学生実習は東北大、筑波大、自治医大など受け入れていたものの、研究からは遠ざかっていた。無論、自治医大地域医療学に在籍していたときも十分な研究はできていなかった。にもかかわらず選んでいただいたのは奇跡なのである。教授にもいろいろなタイプがあるが、自分は学者肌などではまったくなく、扇動家型か宣教師型かと考えている。

総合診療部は不幸な末路をたどったが、部の位置づけや役割にはジレンマが多かったことは事実である。自分

の心根には、今行われている医療に疑問点が多く、経営重視のあり方とは相容れない思いが強い。しかし、何人かの診断治療が困難な患者さんたちと出会い、心身の機微の多くを彼らから学ぶことができた。

総合診療部が廃部となった翌18年に北大教育学研究科修士課程社会人特別枠にトライした。生涯教育計画学グループに入れていただいた。授業がすべて夜間に行われたので単位が取得できた。木村純教授はゼミの題材をわざわざ私のためにクライトンやショーンの著作としてくださった。睡眠障害と戦いながらの夜間学生生活であったが、医師教育における役割モデルの問題を少し整理でき、修士号をいただいた。

研究はもちろん、教育面でのやり残しは多い。ファカルティーデベロップメントには力を注いだ。テュートリアル教育など具体的方法は伝授できたが実現には至っていない。自分の熱意不足と自省している。

大学では自分の大なる限界を痛く知り、思いは次世代の方々に引き継ぐしかない。彼らの活躍をそばで観たいため、道内に残り、診療が主だが、教育の仕事も細々続けて、大学を外からサポートしたいと願っている。深謝。

退職によせて

福島 菊郎 認知行動学分野 教授



生理学第二講座の前任教授の加藤正道先生の後任とさせていただき、私が、この教室を担当することになったのは、1996年（平成8年）の8月でした。それから14年。その間、教室の名称も認知行動学分野と代わり、1996年にこの教室を引き継いだときわずか9名の教室員が、今年度は、海外からの共同研究者も含めて、全教室員数は、20名を超えています。若い力と、私の区切りが来たことを実感しました。

北海道大学医学部で、約30年間、3年目の学生さんに対して生理学実習と神経生理学（生理学Ⅱ）の講義を担当してきましたが、その経験から、学生さんの多くが非

常に優秀なことに、嬉しい驚きと将来の期待を持っていました。すでに講義・実習の折りに述べ、医学部卒業生へのメッセージとして、毎年、残してきたので、ここで追加することはありません。単純ですが、医療と医学の進歩のため、初心を忘れず、努力を継続して下さい。

創設期の北大の、殻を破って外に向かおうとする気風に憧れ、北海道大学（当時の医学進学課程）に私が入学したのは、45年前の1965年でした。以来、退職を迎えた今日まで、公私にわたり、医学部・大学院医学研究科の皆様には、大変お世話になりました。特に、これまで、好きな研究を継続できたのは、教員および事務の皆様、特に、私が所属した生理学第二講座と認知行動学分野の全教室員の皆様のおかげです。感謝しています。

医学部および医学研究科の皆様のみすますの発展を祈念致します。有り難うございました。

退職によせて

佐々木 文章 小児外科学分野 教授



小児外科講座ができましたのは、1999年11月でした。医学部が大学院重点化で改組改変があったときにできた新しい分野です。実際にどのような経緯で出来たのか存じませんが、北海道大学医学部、病院の中に小児外科ができることは、それまで小児外科診療、研究に携わっていた諸先輩の先生の切なる願いでありました。その当時各大学医学部・病院に小児外科講座・診療科ができていたにも関わらず、1990年代の後半頃になっても講座（診療科）ができるというような具体的な話は全くありませんでしたので、私はそろそろ就職先を見つけなければと思っていました。しかし藤堂教授が第一外科教授として赴任して来られてから、小児外科が出来るとの話が出て、長年の夢が実現しました。分野の開設にあたって藤堂教授がいろいろ御尽力していただいたと思います。このことについては特に感謝しております。

北海道大学は旧七帝大中最後にできたわけです。そのため教員の席は他大学に比し少なく、研究や海外での発表はほとんど出来ない状況でした。また、分野ができた

時期が遅かったため他大学と最初から研究、診療面で差をつけられており、なかなか差を縮めることができませんでした。もっと良い方法があったのかもしれませんが、私に十分な能力と経験がなかったため上手に運営出来ませんでしたことを残念に思っています。

小児外科は、小児外科疾患を直すことは当然ですが、外来を診療を行っている“指の形が変だ”、“頬に茶色のしみがある”、“口の中の歯の下の方が白くなっている”、“寝小便が続いている”、などいろいろな訴えが処理しなければなりません。コーディネータとしての仕事も行ってきました。大部分は担当の科に紹介しました。小児科、皮膚科、形成外科、整形外科、神経外科などほとんどすべての科にお世話になりあらためてお礼を申し上げます。

私は、北海道大学医学部の卒業前にどの科に行く全く決めていませんでした。なんとなく医学部に入ったので、どの科へ行きたいとの積極的希望はありませんでしたが、先輩の勧めで第一外科に入ることとなりました。卒後3年目に大学病棟勤務となり、その後ずっと小児外科診療に携わってきました。入局前の日本の小児外科は欧米より数十年遅れており、私が第一外科に入局した1970年代は小児外科の飛躍の時代でした。小児外科セミナーは大勢の若い医師が参加し、小児外科学会でも若い医師であふれており、出席していると、新しい医学の領域に

取り組もうとする熱気がひしひしと伝わってくる状態でした。この状況の中で小児外科を選んだわけです。残念ながら現在では、小児外科学会は成熟した分野となり、今ではもうこのような雰囲気を感じることができません。

当時は第一外科内の小児外科グループに属する医師は多かったのでAPSA（アメリカ小児外科学会）やPAPA（汎太平洋小児外科学会）などに出席したり演題を発表することが出来たのは楽しい思い出です。小児外科グループは秦先生がフランスに留学したので、その後高橋弘昌、浜田、大川先生がフランスへ留学しました。私だけアメリカのテキサス大学サンアントニオ校へ留学しました。そこのZeltzer教授は脳腫瘍専門の小児科医で化学療法を行っていました。脳腫瘍専門の小児科医がいること、小児の化学療法は小児科医が行うことを知って驚き、その後小児の悪性腫瘍の化学療法は小児科医が行うべきであると思うようになりました。研究は髄芽腫の分化に関する研究で、幸いなことに英文論文を仕上げることができ

ました。

私が第一外科に入局したのもたまたまであり、卒後3年目から小児外科診療にかかわったのもたまたまでした。しかし、その中で尊敬できる先輩に指導を受けここまで来ることができました。小児外科医が見る疾患は、鼠径ヘルニア、虫垂炎を除けば、1年間に数例見るかどうかの希な疾患ばかりです。いろいろな疾患を診断治療することは非常に面白い経験でした。今となってはこの分野を選んで良かったな、と思っています。

北大小児外科のますますの発展を祈念して筆をおきたいと思います。

長い間北大医学部、病院で働かせていただきありがとうございました。

3 学術・教育・一般

連携研究センターシンポジウムを開催して

吉岡 充弘 副研究科長

第4回医学研究科連携研究センターシンポジウムが去る3月24日、医学部臨床大講堂において開催されました。本連携研究センターは平成18年4月に生命科学における堅実な「知の探求」と飛躍的に未来を切りひらく大胆な「知の創造」追求する組織体制としてスタートしました。これまで、各方面と連携して、広い領域の科学技術の成果を医療や健康維持活動分野におけるイノベーションへ発展させる研究活動の取り組みを行っています。今回は「学際的医学研究の拠点形成と知の追求」をテーマに、各部門からの取り組みに関する最新の情報提供がなされました。プログラムは以下の通りです。

1. 分子・細胞イメージング部門

「発光およびラジオアイソトープ技術を駆使した分子、細胞イメージング」

（核医学分野／玉木長良）

「多光子励起顕微鏡による神経活動の可視化解析」

（連携研究センター先端光イメージング研究拠点
／榎木亮介）

「MicroPETを用いた分子標的治療効果判定」

（トレーサー情報分析学分野／趙 松吉）

2. 再生医療・細胞工学部門

「高機能高分子ゲルを用いた軟骨自然再生誘導法の開発と臨床応用へ向けた研究」

（運動機能再建医学分野／北村信人）

3. 脳科学部門

「成体期におけるシナプス回路の維持機構」

（解剖発生学分野／渡辺雅彦）

4. 人獣共通感染症診断・治療部門

「ハンタウイルス感染症流行ウイルス型の迅速鑑別法について」

（病原微生物学分野／有川二郎）

5. 医学物理学部門

「高精度動体追跡放射線治療装置の開発」

（医学物理工学分野／宮本直樹）

本シンポジウムではまず、安田和則センター長（医学研究科長）からセンター概要の説明があり、これまでの取り組みについて説明がありました。ついで、「分子・細胞イメージング部門」から、それぞれの部門における最新情報が提供されました。参加者にとって、有意義な情報が提供され、今後の取り組みに向けて新たな可能性が示されたシンポジウムとなりました。本年9月1日に第5回シンポジウムをイノベーション分子イメージング・シンポジウムと同時開催する予定です。

寄附講座紹介「眼循環代謝学」

教授 石田 晋

平成22年4月1日から新設されます寄附講座「眼循環代謝学講座」についてご紹介申し上げます。

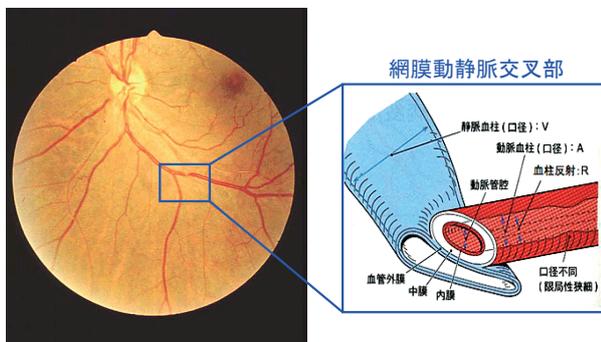
眼循環代謝学講座では、眼底撮影や光干渉断層法などの非侵襲的検査によって得られる眼底画像情報の解析手法を研究し、生活習慣病に由来する眼疾患を対象とした診断機器の新規開発を行ってまいります。また、その解析法および診断機器を用いた「眼底画像情報の客観的評価法」を確立し、眼所見による生活習慣病スクリーニングシステムの構築を目指します。そして、生活習慣病に由来する眼疾患の病因、病態の解明を目的とした基礎的・臨床的研究を行うことによって、教育研究の活発化を図り、国内はもとより世界の視覚研究従事者、若手研究員、大学院生などに視覚研究の手法、臨床試験の具体的な研究指導を行い、人材養成に貢献することをその目的としております。

当該寄附講座の研究プロジェクトは、生活習慣病、特に高血圧眼底の客観的評価法の確立ならびにその臨床応用をその主眼におきます。これまで眼科領域においては、高血圧性眼底変化の分類法としてScheie分類、あるいはKeith-Wegener分類が使用されてきました。これらの高血圧眼底の評価法が臨床にもたらしてきた有用性は計り知れません。しかしながら、その一方でこれらの分類法は検者が網膜血管を肉眼で直接観察する主観的評価法であることから、検者や測定する場所によって評価が変動する可能性があります。そのため、高血圧眼底の所見は生活習慣病によって生じる全身病態の予後予測因子やその病態評価に有用なパラメータである可能性が高いにも関わらず、現時点ではあまり有益な臨床情報として利用されていない側面があります。また、他科医師がその眼底所見から得られる情報を臨床上ほぼ利用できず、眼科から他科へのフィードバックとして役立っていないというのも現実であるかと思われまます。これらの問題点を

考慮するならば、高血圧性眼底に対する評価法は従来の客観性に乏しいという問題点を克服する必要性に迫られていると言えます。

実際の研究手法としては、眼底画像解析装置を使用して客観的な高血圧眼底評価を目的とした診断手法を検討します。すなわち、網膜細動脈硬化評価、高血圧性眼底変化検出、動脈硬化性眼底変化及び乳頭データなどを眼底画像から自動解析するアルゴリズムを開発し、その眼底画像から得られた情報が従来の高血圧性眼底評価法と比して有用であるか、また他科診療における有益な情報となりうるかを検証します。客観的な手法による高血圧眼底評価は、他科における診療に有益となる可能性が高いと考えております。さらに、網膜血管の画像解析が生活習慣病のスクリーニング手法として有用であることは以前より知られており、眼底画像の自動解析装置によるCAD (Computer Aided Diagnosis) は生活習慣病の早期発見に役立ち、生活習慣病スクリーニングシステムとして有用な情報を提供すると考えられます。また、本研究プロジェクトによって開発される眼底診断機器は、高血圧性眼底以外にも糖尿病網膜症や加齢黄斑変性の客観的評価への応用も可能となると考えられ、その発展性が期待できます。

当該寄附講座は、石田晋教授(学内兼務)を中心として、齋藤航特任講師、野田航介講師(学内兼務)により構成されており、基礎的な実験研究、臨床への新たな応用研究の一部を眼科学分野の関連講座となる当該寄附講座がこれまでの眼科学分野とお互いに機能分担して研究、教育の充実・発展を目指し、研究面のみならず臨床面や教育面にも大きく貢献してまいり所存でございますので、今後とも寄附講座「眼循環代謝学講座」にご指導、ご鞭撻の程何卒宜しく御願申し上げます。



高血圧眼底
(Scheie分類H2S3, Keith-Wegener分類Ⅱa)



野田航介 講師(学内兼務)

齋藤 航 特任講師

医学研究科・医学部医学科

「優秀研究賞」「優秀論文賞」について

平成17年度に「北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の顕彰内規」が制定され、今年度は第4回目の顕彰となりました。この顕彰は「優秀研究賞」、「優秀教育賞」「優秀論文賞」および「特別賞」の4賞からなり、それぞれ顕著な研究業績をあげた専任教職員、顕著な教育業績をあげた専任教職員、特に優れた論文を発表した専任教職員・学生等に、そして国内外において顕著な社会貢献をされた方々に対し授与するものです。この顕彰には、様々な難題を抱えた中での法人化への船出を迎え、活力のある医学研究科発展へのきっかけとすべく思いが込められています。すなわち、医学研究科構成員を元気づけるような活発な活動をされている方々の功績を称えることで、医学研究科を活性化していきたいとするものです。



表彰式での記念撮影

優秀研究賞

優秀研究賞を受賞して

本間 さと 時間生理学分野 教授

この度は、私の行ってきました研究「生物時計の中核メカニズム：発光レポーターを用いた細胞リズム解析」に対し、平成21年度医学研究科優秀研究賞を授与して頂き、大変光栄に存じます。受賞の対象となりました研究業績は、ここ5～6年、特に力を入れて参りました発光レポーターを用いた生物時計機能研究です。「生物時計」は約24時間周期の振動を自律的に発振します。当然、24時間以上の連続計測が必要で、個体レベルは勿論、培養組織でも、数週から数ヶ月の連続計測が行われます。かつては(今でも)、リズム研究では徹夜実験が日常的でした。尾先端からの採血、培養液の採取、マイクロダイアリスなどで、最も眠い3-4時頃に決まってトラブルが続出し、暗闇の中での修復作業に泣きたい思いをしたことが何度もあります。約10年前に、概日リズム発振に係わるほ乳類の「時計遺伝子」がクローニングされ、リズム現象を追いかけるだけのこれまでの研究法が大きく転換しました。研究の進展に大きく貢献したのが発光レポーターです。ホタルルシフェラーゼなどの発光酵素をコードする遺伝子の導入で、プロモーター活性や蛋白レベルが連続的に計測できるようになりました。組織さえ用意すれば、あとは研究者が寝ていてもデータが自動的に記録されます。私達の

分野では、いち早くこの方法を取り入れ、各種時計遺伝子レポーターマウスを作成してきました。この間、技術の導入には産総研の近江谷（前光生物学分野教授）・中島両先生の、プロモーター配列の提供には埼玉医大の池田教授などに、協力して頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。先端的な研究を維持するには、昨今、各分野の専門家の協力が不可欠であり、国内・国際レベルでの積極的な共同研究の推進こそ、研究者が生き残る道だと考えます。また、必要は発明の母で、機器やソフト開発も専門業者に働きかけ、物作りに係りました。単一神経細胞から長期間、電気活動を記録するマルチ電極アレイディッシュも、培養法の普及から計測機器の改良まで、未だに注文を付けています。リズム計測機器の領域で日本が世界をリードしているのは、個々の研究者がマニアックな機器を作り上げるという諸外国の実情に対し、国内では、各業者が研究者のアイデアに答え、機器開発に熱心であったためです。これら、細胞レベルでのリアルタイム・多機能計測技術により、脳の時計が日長をコードして季節に応じた行動リズムを示すメカニズムなどを発見するに至りました。これからは、培養組織だけでなく、自由に行動している動物においても分子レベルの機能を長期計測し、生物時計機能の本質に迫りたいと思います。最後に、研究を支えてくれた時間生理学分野の本間研一教授を始め教室員の皆さんに心からお礼を申し上げます。

優秀論文賞

優秀論文賞を受賞して

榎木 亮介 連携研究センター光バイオイメージング部門

この度優秀論文賞を頂く事になり大変光栄に思っております。私は大学院時から神経細胞の働きを可視化する

研究を行っています。その対象物は脳の海馬や網膜の神経細胞であったり、最近では視交叉上核の神経回路であったりと様々ですが、一貫して「Seeing is Believing : 百聞は一見にしかず」を目標に、生きたまま脳の働きを可視化する研究を行っています。今回優秀論文賞を頂き

ました研究は、多光子顕微鏡という組織深部から非侵襲的に観察できる観察技術を用い、海馬神経細胞の単一シナプスのカルシウム動態やその性質を詳細に観察することで、記憶学習の素過程と考えられるシナプス可塑性のメカニズム解明に取り組んだものです。研究では、シナプス可塑性が起きる際にはシナプス前終末からの伝達物質の放出確率が長期間増大・減弱することを見いだしました。この結果は現在の研究の潮流とは逆の結果であり、論文審査の際にはレフェリーから厳しいコメン

トが多くあり、無数の追加実験と複雑な統計解析が必要でした。また実験は極めて繊細な高い技術を要するもので、データがとれずに真っ暗闇の顕微鏡室で頭を抱える悪戦苦闘の日々でしたが、とても貴重な経験でありましたし大きな自信となりました。現在は連携研究センターにさらに高性能な多光子顕微鏡の構築を行っており、面白いことを見てやろうと意気込んでいます。また次年度以降も論文賞を頂けるように邁進したいと思いま

優秀論文賞を受賞して

初谷紀幸 連携研究センター光バイオイメージング部門

私はこれまで一貫して植物の耐病性機構に興味をもって研究を行ってきました。私たち動物のような免疫系をもたない植物は、病気に侵された細胞をアポトーシスにより積極的に排除します。動物のアポトーシスではカスパーゼとよばれる蛋白質分解酵素の一群が重要な役割を果たしていることが知られています。

一方、植物ゲノムにはカスパーゼに相当する遺伝子が存在しないことが明らかにされています。これまで国内外で競って植物アポトーシスを司る蛋白質分解酵素の探索が精力的に続けられてきたにも関わらず、そのような

分子の同定には至っていませんでした。

今回、優秀論文賞を頂いた研究は、長い間不明であった植物アポトーシスの鍵を握る分子を同定し、耐病性の分子機構の解明に取り組んだものです。植物アポトーシスおよび耐病性の分子機構は、私たちの研究により初めて解析の糸口となる分子が同定されたことで、今後その詳細の解明が飛躍的に進むものと思われま

私は現在、植物アポトーシスを制御するいくつかの分子の発現や機能を個体、細胞レベルで“生きたまま”可視化することにより、時間的、空間的制御を動的に理解しようと研究に取り組んでいます。今後も優秀論文賞を目指して研究を展開していきます。

医学研究科・医学部医学科「優秀論文賞」を受賞して

加瀬諭 眼科学分野

北大眼科の加瀬でございます。診療は眼腫瘍、眼形成眼窩手術、網膜硝子体疾患、白内障、翼状片、ぶどう膜炎を専門にしております。このたび医学研究科・医学部医学科、平成21年度優秀論文賞を受賞することになりました。医学研究科長 安田和則先生、北大大学院医学研究科の選考委員の先生、および関係者様に厚く御礼申し上げます。今回、受賞対象になりました研究論文につきまして、簡単に述べさせていただきます。

本研究では、眼内新生血管モデルとして、マウス酸素誘導網膜症モデルと、レーザー誘導脈絡膜新生血管モデルを使用しました。これらのモデルを使用することになり、

VEGFの分解機構に、分子シャペロンである α B-クリスタリンが重要な働きを示すことを初めて明らかにしました。また、 α B-クリスタリンの発現を抑えることにより、VEGF蛋白の分解が促進され、新生血管組織のVEGFの蛋白濃度が低下し、病理的新生血管の発達が阻害されることを確認しました。

これまでの研究では、VEGFの発現機構、およびVEGFのシグナル経路の解析が主体でした。しかしながら、本研究ではVEGF蛋白が新生血管作用を示すためには、VEGFの発現のみならずVEGFの分解制御が重要であることが明らかとなりました。

このたびの優秀論文賞を期に、ますます診療、研究に打ち込み、将来のより良い医療につなげることができたら、と考えております。今後ともご指導賜りますようお願い申し上げます。

医学研究科・医学部医学科「優秀論文賞」を受賞して

芳賀早苗 分子制御外科学講座

私はこれまで、一貫して肝の生理的・病的状態を制御している細胞内シグナルの解明をテーマとして研究を行ってきました。近年は、肝再生・障害を制御する分子メカニズムの解明を試みることにより、両者に対する治療に向けた分子ターゲットを見出し、将来的に治療に役立てることを目指しています。優秀論文賞をいただいた本研究論文は肝再生における肝細胞の本質的な役割とそ

の分子機構の解明を試みたものです。

これまでの研究報告では、肝の再生には細胞増殖能が重要と考えられており、これに関与した分子機能に焦点をあてた研究が行われてきました。ところが、細胞増殖に強く関与するSTAT3の肝特異的ノックアウトマウスによる初期の実験結果より、肝再生における細胞増殖の役割に疑問を抱きました。PI3-K/PD1/Aktは種々の細胞において生存・細胞サイズに関与する可能性が示されていたため、我々はこの経路に着目し、肝再生における役割を中心に解析を行いました。

その結果、この経路は肝細胞保護（生存）だけでなく、肝細胞機能を維持しながら細胞サイズの増大（細胞成長）により肝再生を積極的に制御していることを見出しました。本研究結果より我々は、肝再生には細胞増殖だけで

なく、細胞成長機能が必須であることを明らかにしました。この論文に対してこのようなすばらしい賞をいただいたことを非常に光榮に思うと同時に、今後の研究の大きな励みにしたいと思います。

医学研究科・医学部医学科「優秀論文賞」を受賞して 阿部 理一郎 皮膚科学分野

このたび医学研究科・医学部医学科「優秀論文賞」を受賞させていただき、大変うれしく思います。

私は以前から重症薬疹について臨床的、基礎的側面から研究を行っております。重症薬疹のなかでも特にStevens-Johnson症候群（SJS）は視力障害をはじめとする重篤な後遺症を残すことがあり、さらに最重症型の中毒性表皮壊死症（Toxic epidermal necrolysis: TEN）は未だ死亡の転機をとることがある疾患です。

これらの疾患の臨床的な問題点として、発症当初は通常の薬疹と鑑別が困難で、さらに数日の経過で急激に進行することが多く、適切な治療の開始が遅れることがあげられます。

さらに病理学的に皮膚の上層にアポトーシスが多く見

られ、そのため、びらん・水疱をきたすことが特徴とされます。このことから私はアポトーシスを誘導する液性因子に注目し、患者血清中のタンパクで早期重症薬疹と通常薬疹を鑑別できるものを検索したところ、まずは可溶性FasLという蛋白が特異的に早期重症薬疹で上昇することを明らかにしました。

臨床的な目標として、簡易に上昇タンパクを検査できるキットの作成を目指したのですが、残念ながら濃度が低すぎ断念しました。しかしその後、別のgranukysinというアポトーシス誘導蛋白がSJS/TEN発症に関与するという報告が出て、我々も患者血清で測定したところ、同様に鑑別に有用であるとの結果を得ました。このデータを報告した論文が受賞論文です。幸いにgranulysinの濃度は高く、さらに簡易検査の作成にも成功しました。これから臨床の場での応用をしていきたいと思っております。

「優秀論文賞」を受賞して 外丸 詩野 分子病理学分野

平成21年度「優秀論文賞」を頂き、医学研究科・医学部医学科の皆様ならびにご推薦いただいた分子病理学分野教授笠原正典先生に心から御礼申し上げます。受賞対象となりました論文は、胸腺内T細胞選択に関わる内在性ペプチドを産生する分解酵素複合体、胸腺プロテアソームのヒト胸腺における発現を検討した論文でございます。プロテアソームはユビキチンシステムと連動してタンパク質分解を制御・実行する複合体であり、細胞周期、シグナル伝達、ストレス応答、免疫応答等の多様な生命現象に関与しています。プロテアソームは重要な生理的役割を担っていますので、その機能異常はヒト疾患の病態に関与していると考えられております。今後はさらに

研究を進展させ、ヒト疾患の病態解明を目指した研究を進めて参りたいと存じます。

本賞は私が代表として頂きましたが、共同研究者の皆様といっしょに頂けた賞でございます。また、これまで私を叱咤激励して下さいました諸先輩方、特に恩師であります北海道大学名誉教授 吉木 敬先生には、研究の基礎や病理学研究の在り方をご教示いただきましたことを心から感謝しております。皆様にこの場を借りて感謝の気持ちを伝えたいと思います。ありがとうございました。

今回の受賞を励みに、これからも微力ながら医学研究の発展のために努力したいと思っております。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

医学研究科・医学部医学科「優秀論文賞」を受賞して 七戸 夏子 眼科学分野

思えば入局1年目の地方会で神経眼科関連の症例報告をしたことがきっかけでした。それ以来神経眼科に興味を持つようになり、5年間の研修の後大学院に入学し、神経眼科グループが代々お世話になってきた福島菊郎教授の生理学講座認知行動学分野（旧第2生理）で研究を行わせていただきました。

受賞した論文「Memory and Decision Making in the Frontal Cortex during Visual Motion Processing for

Smooth Pursuit Eye Movements」は、滑動性追跡眼球運動（smooth pursuit）における前頭葉の役割を明らかにするため、ニホンザルに新しい眼球運動課題を訓練し、補足視野のニューロン記録および化学的一時不活性化を行ったものです。その結果、補足視野には視標の運動方向の判断と記憶、眼球運動を行うか否かの決定、眼球運動準備に関連した信号が存在し、smooth pursuitにおいて必須の領域であることが示されました。4年間、福島教授をはじめ認知行動学分野の教室の皆様には、サルの訓練から実験、解析その他様々のことをご指導いただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

香港大学李嘉誠醫學院学生交流派遣留学報告書

鈴木裕貴 医学部医学科6年次



随行した有賀医学科教務委員会委員長（左から3人目）と派遣学生5名（左から、津田健司、駒井俊彦、有賀教授、石田雄大、薫一帆、鈴木裕貴）

私は、平成21年10月19日～30日の期間、香港大学李嘉誠醫學院に留学し内科を学びました。

2週間の留学期間中、私は現地の医学生とともに医学教育を受けました。講義やレクチャーは全て英語で行われ、医師と患者の会話は広東語を使用していました。自由時間には現地医学生と昼食を取り、お互いの国のことや医学教育について話をしました。また、同じく今回香港へ派遣となった同輩とも、毎日いろいろな話をしてお互いの経験や考えを共有しました。

日本と香港の医療における相違点について考えると、一つに医療に対する根本的な考え方が違うと感じました。日本では「患者主体」の医療が行われていますが、香港では「医師主体」の医療が行われているように思います。病院内では医師の権威が患者に比べて圧倒的に高く、医師の判断は絶対的なものであり、医師と患者間に歴然とした立場の違いを感じました。二つ目として、香港では、医療資源の節約や患者の医療費負担の軽減にかなり重きが置かれているように感じます。香港では沢山の貧しい患者が医療を受けていることは、その理由の一つに挙げられると思いました。これらの相違は、単に医療そのものの相違ではなく、患者の医療に対する知識や患者背景をはじめ、医療制度、社会システムなど様々な要因によるものであり、各国の社会に合わせた医療が行われていると考えます。

香港での医学教育は、非常に体系的で学生に積極的な思考を促すものでした。私が一緒に実習をしたのは5年

生でしたが、最終学年では論理的思考能力を養うべく、院内の様々な症例をもとに、与えられた情報から鑑別診断を挙げ、その各々について議論していくという診断学に焦点をあてた教育がなされていました。下級生は早期から身体診察を徹底的に実践し指導される機会が多いようです。医学生は自身で患者の身体所見をとるのですが、彼らは日本の臨床医に負けずとも劣らないほど上手に身体診察をしていました。香港の医学生・医師の診察レベルの高さを感じ、私にはとても刺激的でした。

私は現地の医学生との交流を通じ、日本の医学生と異なる点を沢山感じました。特に印象深かったことは、彼らの医学という学問に対する真摯な姿勢と意欲の高さ、そして医学知識の多さ、深さ、そして身体診察能力の高さでした。

今回の香港大学李嘉誠醫學院留学を通して、現地で行われている医療や医学教育に触れ、また医学生と交流を持つことで沢山の貴重な経験をすることができました。一生の思い出になりました。私は来春より医師になりますが、責任感を持ち、日本と香港の医学の長所、短所を踏まえ、香港大学の同輩に負けないよう、より一層医学の道に邁進していきたいです。

最後になりましたが、この香港大学李嘉誠醫學院留学が実現し、沢山の貴重な経験をさせていただきましたのも、先生方や教務担当の方々をはじめ、沢山の方のご協力の賜物に他なりません。本当にありがとうございました。



内科講義室、つかの間の休息（手前、左から2人目、駒井）

第52回東医体スキー競技 男子総合6連覇の御報告

神野 敦 医学部5年 学友会スキー部 主将

先日、秋田県田沢湖にて開催されました第52回東日本医科学生総合体育大会（東医体）スキー競技において、我が医学部学友会スキー部は、男子総合部門におきまして優勝を勝ち取りました。この優勝により、第47回大会から続く東医体連勝記録を6に伸ばしました。男子総合6連覇は34年ぶりの快挙になります。

また、女子総合部門もよく健闘し、4位入賞を果たしました事を併せて御報告申し上げます。

今年度の東医体は2010年3月9日から16日にかけて、秋田県田沢湖にて岩手医科大学主観の下、開催されました。出場校は33校に上り、クロスカンントリー競技3種目及びアルペン競技3種目の計6種目を全8日間の日程で争いました。

大会結果は、男子が756.5点を獲得し、2位に300点以上の大差をつけての総合優勝。大会初日から首位を独走し、8日間に及ぶ大会期間中1度も首位の座を明け渡すことなく優勝を勝ち取りました。

クロスカンントリー競技では、3種目全てにおいて金メダルを獲得した6年寺田周平選手を筆頭に、多くの選手が上位争いに加わりました。大会最終日に行われたリレー競技において、最終走者が部旗を振ってゴールする姿は、王者北大に相応しいシーンでした。

アルペン競技では、4年吉川剛平選手がエースの名に相応しい滑りを見せ、見事2つの銀メダルを獲得しチームを牽引しました。本人は優勝を逃し悔しいレースであったと振り返りますが、立派な成績だと思います。

女子は、よく健闘しました。5名の選手しかいないに

も関わらずよく戦い、総合4位入賞を果たしました。しかしながら、上位校と比較すると、力不足の感は否めず、まだまだチームとして未成熟な点が見られましたが、成長過程のチームですので、来年度に向け練習に励み、総合優勝を目指したいと思います。

2009年6月に発行されました医学部広報第39号では、我々スキー部が、昨年度の東医体において、5年連続男子総合優勝を果たし、悲願であった永久杯を獲得致しました事を御報告させて頂きました。今年度は、さらにその連勝を伸ばすべく、そして、次の永久杯である10連覇に向けた第一歩を刻むべく、チーム一丸となり練習に取り組んで参りましたが、その努力をこの結果に結びつけることが出来、大変嬉しく思っております。

東医体総合優勝という最高の形でシーズンを終える事が出来たのも、ひとえに、御指導御支援して下さいましたOB・OGの諸先輩方、そして各部員の活動に理解を示して下さいている御家族の皆様のお陰であると感謝しております。現役部員を代表致しまして、御礼申し上げます。

また、医学部の先生方には、部員の活動に際し、授業の振り替えや試験日程の御調整等、御配慮して頂きましたことを、この場をお借りしまして心より感謝申し上げます。

季節は春を迎え、スキーシーズンは終わりを迎えましたが、来年度の東医体において男女総合優勝の御報告が出来ますよう、今シーズンも全力で努力していく所存であります。これからも医学部学友会スキー部をよろしくお願い申し上げます。

男子総合成績

順位	大学	クロスカンントリー競技			アルペン競技			合計
		15km Fr	8km Fr	リレー	SG	GS	SL	
優勝	北海道大学	254	238	46	93	73.5	52	756.5
準優勝	順天堂大学	37	27	37	115	111	115	442
3位	東北大学	144	163	43	28	43	12	433

女子総合成績

順位	大学	クロスカンントリー競技			アルペン競技			合計
		15km Fr	8km Fr	リレー	SG	GS	SL	
優勝	旭川医科大学	39	35	25	39.5	43	37	218.5
準優勝	札幌医科大学	18	38	15	45.5	16	21	153.5
4位	北海道大学	33	37	21	0	0	0	91



東医体6連覇を決めて



男子リレー 部旗を振ってゴール

4 お知らせ

◆ フラテ祭2010開催について ◆

フラテ祭2010を、9月19日（日）に開催いたします。

フラテ祭は、平素からご支援をいただいております関係各位と医学部の親睦をさらに深め、医学部の現状を見ていただくことにより今後の抱負や課題を認識していただくための場としており、本年度で4回目の開催になります。

今年は、従来通り北大医学部の変化・革新をお伝えすると共に、医学部創立90周年を記念して建てられた「フラテ会館」の落成を祝い記念式典を執り行います。楽しい「祭」となるよう、今から準備を進めております。全国の同窓生に加え、ご寄附いただいた学生父母、関連企業および医療関係者の皆様方をお招きします。教職員の皆様にも、ご協力およびご参加をお願い致します。

医学部フラテ祭実行委員会事務局

日時：2010年9月19日（日）13：30～19：00

場所：北海道大学医学部／フラテ会館

第1部 フラテ会館落成記念講演会(フラテ会館ホール)14：00～

- 北海道大学医学部長 安田 和則
- 北海道大学病院長 福田 諭
- 北海道医療大学学長 新川 詔夫

第2部 フラテ会館落成記念式典(フラテ会館ホール)15：30～

- ご挨拶
- 新しい医学研究科／医学部（フラテ会館）の紹介
- 音羽博次奨学金授与式

第3部 フラテ交歓会（フラテ会館）17：00～

- ご挨拶
- 祝 杯
- 祝 宴
- 乾 杯

※プログラムの内容は、一部変更になる可能性があります。

◆ 第104回 医師国家試験合格状況 ◆

第104回医師国家試験合格者について、去る3月29日（月）厚生労働省から発表されました。

本学部の合格状況は、受験者105人、合格者98人、合格率93.3%でした。新卒・既卒の内訳等は次のとおりです。

今年度の合格率は新卒が全国平均を上回り、全国医学部80学部中17位の結果となりました。

なお、既卒者で合格した方は、平成21年3月卒業生3名でした。

	受験者	合格者	合格率	全国平均合格率
新 卒	99人	95人	96.0%	92.8%
既 卒	6人	3人	50.0%	52.4%
合 計	105人	98人	93.3%	89.2%

◆ 平成22年度 大学院入学状況 ◆

修士課程

専 攻 名	定 員	入学者数
医 科 学	30	24 (1)

博士課程

専 攻 名	定 員	入学者数
医 学	100	94 (5)

() 内は留学生で内数

◆ 平成22年度 医学部医学科入学状況 ◆

平成22年度の北海道大学入学式が去る、4月8日（木）午前10時から札幌コンベンションセンターにおいて、午後2時からは医学科入学式が臨床大講堂において挙行されました。

医学科入学式では、初めに新入生を代表して相澤翔吾

さんの入学者宣誓があり、引き続き安田医学部長の告示、福田北海道大学病院長、齋藤医学部同窓会会長の祝辞がありました。

医学科の入学者は107人で、内訳は次のとおりです。

（ ）内は女子で内数

医 学 科	試験区分	入学者数		内 訳					
				道内高校出身		左記以外		現 役	
	前期日程	92	(13)	55	(8)	37	(5)	30	(4)
	後期日程	15	(4)	8	(3)	7	(1)	12	(3)
	計	107	(17)	63	(11)	44	(6)	42	(7)
	【参考：21年度】	100	(20)	57	(10)	43	(10)	37	(8)

◆ 平成21年度 大学院学位授与状況 ◆

		学位授与数（課程修了者数）			
		6月30日	9月25日	12月25日	3月25日
修 士 課 程	医 科 学				29
博 士 課 程	病 理 系				
	内 科 系				
	外 科 系				1
	生 体 機 能 学				3
	病 態 制 御 学	1	1	1	31
	高 次 診 断 治 療 学	1	4	1	12
	癌 医 学	1			9 (1)
	脳 科 学				4
	社 会 医 学			2	6
	医 学				4 (4)
	計	3	5	4	99

（ ）内は内数で短縮修了者数

	学位授与数			
	6月30日	9月25日	12月25日	3月25日
論 文 博 士	1	1	1	2

◆ 医学部医学科学士学位記伝達式 ◆

平成22年3月25日（木）午前10時から大学主催の学位記授与式に引き続き、午後1時30分から本学部臨床大講堂において、学士学位記伝達式が挙行されました。

伝達式では、安田医学部長から卒業生一人一人に学位記が手渡され、次いで、安田医学部長の告辞、長瀬医学部同窓会副会長の祝辞の後、卒業生を代表して、総代の雨宮正和さんから答辞が読み上げられ、6年間の感謝の意と新たに医師・医学研究者として羽ばたく決意が述べられました。



◆ 平成21年度 各種助成の採択状況 ◆

財団法人等名	種 別	研究者名	交付金
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所	2009年度共同研究A	笠原 正典	180,000
社団法人 日本皮膚科学会	基礎医学研究費	猪熊 大輔	500,000
財団法人 成人血管病研究振興財団	平成21年度学術研究支援	西本 新	500,000
財団法人 喫煙科学研究財団	平成21年度研究助成	三輪 聡一	4,000,000
		吉岡 充弘	2,000,000
		秋田 弘俊	2,500,000
		別役 智子	5,000,000
		玉木 長良	2,000,000
財団法人 日本応用酵素協会	平成21年度研究助成	岩永 ひろみ	1,000,000
財団法人 三島海雲記念財団	平成21年度学術研究奨励金	岩永 敏彦	1,000,000
財団法人 秋山記念生命科学振興財団	研究助成 (一般)	秋山 真志	1,000,000
	研究助成 (奨励)	外丸 詩野	1,000,000
		津田 真寿美	500,000
財団法人 伊藤医薬学術交流財団	学会等助成	猪熊 大輔	500,000
	交流助成	本間 研一	450,000
		福田 諭	450,000
		吉岡 英治	200,000
社団法人 全日本コーヒー協会	研究助成	大村 優	200,000
財団法人 日本リディオリリー協会	研究助成	西村 正治	200,000
ネスレ栄養科学会議	研究助成	神谷 温之	1,500,000
財団法人 石本記念デサントスポーツ科学振興財団	研究助成	有田 賢	500,000
財団法人 札幌国際ブラザ	札幌国際ブラザ助成金	神谷 温之	1,000,000
財団法人 北海道大学クラーク記念財団	博士後期課程在学学生研究助成	絹川 真太郎	500,000
		本間 研一	80,000
		藤田 靖幸	500,000
		須藤 洋一	450,000
		夏賀 健	500,000
財団法人 三井生命厚生事業団	研究助成金	王 磊	500,000
財団法人 金原一郎記念医学医療振興財団	基礎医学医療研究助成	佐々木 知幸	500,000
財団法人 伊藤科学振興会	研究助成	小谷 善久	1,000,000
社団法人 日本医師会	研究助成	畠山 鎮次	500,000
	医学賞 (社会医学)	安東 頼子	800,000
財団法人 かなえ医薬振興財団	研究助成	瀬谷 司	1,500,000
財団法人 医科学応用研究財団	調査研究助成	岸 玲子	5,000,000
財団法人 内藤記念科学振興財団	若手研究者海外派遣助成金 (秋季)	絹川 真太郎	1,000,000
財団法人 日本応用酵素協会	研究助成	柳 輝輝	1,000,000
財団法人 持田記念医学薬学振興財団	国内及び海外留学補助金	安田 和則	2,000,000
財団法人 北海道心臓協会	研究助成	大平 洋	350,000
財団法人 先進医薬研究振興財団	精神薬療分野 一般研究助成	絹川 真太郎	450,000
	血液医学分野 萌芽研究助成	納谷 昌直	500,000
財団法人 寿原記念財団	医学の基礎と臨床助成	絹川 真太郎	750,000
財団法人 島原科学振興会	「医薬研究部門」研究助成	小山 司	1,000,000
株式会社 資生堂リサーチセンター	JSID' Fellowship SHISEIDO Award 研究助成	奥村 文彦	1,000,000
財団法人 日本脳神経財団	学術研究助成	大場 雄介	1,000,000
財団法人 上原記念生命科学財団	研究助成金	堀之内 孝	600,000
	研究奨励金	有田 賢	1,000,000
		畠山 鎮次	500,000
財団法人 小野医学研究財団	研究奨励助成金	安田 和則	5,000,000
財団法人 光化学技術研究振興財団	研究助成金	岩永 敏彦	5,000,000
AOSpine Japan Chairman	AOSpine JapanResearch 2010	船越 忠直	2,000,000
財団法人 中富健康科学振興財団	研究助成金	柳 輝希	1,000,000
社団法人 日本皮膚科学会	基礎医学研究費	榎木 亮介	1,800,000
財団法人 平和中島財団	国際学術研究助成	伊東 学	1,000,000
公益信託 小野がん研究助成基金	研究助成	畠山 鎮次	1,000,000
財団法人 住友生命社会福祉事業団	海外医学研究助成金	大場 雄介	550,000
財団法人 鈴木泌尿器医学振興財団	海外学術誌論文掲載費助成	夏賀 健	1,500,000
財団法人 成人血管病研究振興財団	学術研究支援	守屋 仁彦	50,000
財団法人 整形災害外科研究助成財団	研究助成	吉永 惣一郎	500,000
財団法人 喫煙科学研究財団	研究助成	船越 忠直	1,000,000
		三輪 聡一	2,000,000
		吉岡 充弘	2,500,000

平成22年3月31日までの採択判明分

5 事務部から

医学部創立90周年記念事業募金活動 ー最終報告ー ー募金目標額5億円が達成されましたー

小山 司 医学部創立90周年記念事業実行委員会副委員長

医学部創立90周年記念事業基金の募金活動についてお知らせします。表に示すとおり、平成22年3月末時点での募金の納入全体額は5億円を超え、ついに募金目標額に到達しました。真に御同慶の至りです。

これまで本募金活動へのご理解とご協力をいただいた、医学部・病院教員はもとより同窓会の皆様、また関係各方面の皆様に心より謝意を表します。今回をもって最終報告とします。ありがとうございました。

寄附金納入状況 (H22.4.30現在)

寄附金合計 501,404,252円

◎教員		261名 / 450名 (58.0%)	45,280,000円
(内訳)			
医学科	専任教員	126名 / 160名 (78.8%)	26,240,000円
	特任教員	9名 / 32名 (28.1%)	740,000円
病院	専任教員	97名 / 174名 (55.7%)	12,280,000円
	特任教員	2名 / 5名 (40.0%)	300,000円
保健学科	専任教員	26名 / 78名 (33.3%)	5,520,000円
	特任教員	1名 / 1名 (100.0%)	200,000円
◎分野		3件	1,800,000円
◎同門会(団体)		2件	2,000,000円
◎同窓生(教員は除く)		1426名 / 6010名 (23.7%)	254,044,367円
◎学生の父母		122名 / 1434名 (8.5%)	14,449,885円
(内訳)	医学科	95名 / 598名 (15.9%)	12,029,885円
	保健学科	27名 / 836名 (3.2%)	2,420,000円
◎大学院生		1件	210,000円
◎法人等		231件	177,850,000円
◎篤志家 (団体・個人(同門会員を含む))		35件	5,770,000円

ご寄附いただいた法人・企業・団体等

1	医療法人 愛全会	60	医療法人社団 蘇春堂形成外科
2	医療法人 あすくレディスクリニック	61	医療法人社団 寺島整形外科
3	医療法人 いしかわクリニック	62	医療法人社団 苫小牧緑ヶ丘病院
4	医療法人 美しが丘眼科	63	医療法人社団 豊平おおたこどもクリニック
5	医療法人 英生会 野幌病院	64	医療法人社団 西谷皮膚科医院
6	医療法人 エム・ティール・エヌ 北海道泌尿器科記念病院	65	医療法人社団 プリモウイメンズクリニック
7	医療法人 延山会	66	医療法人社団 平成醫塾 苫小牧東病院
8	医療法人 王子総合病院	67	医療法人社団 朋仁会
9	医療法人 亀田病院	68	医療法人社団 萌生舎 宮の沢泌尿器科クリニック
10	医療法人 歙生会 豊岡中央病院	69	医療法人社団 朋友会 石金病院
11	医療法人 清田病院	70	医療法人社団 北斗
12	医療法人 溪仁会	71	医療法人社団 友愛会 恵愛病院
13	医療法人 啓生会病院	72	医療法人社団 養生館 苫小牧日翔病院
14	医療法人 恵哲会	73	医療法人社団 我汝会 えにわ病院
15	医療法人 研成会	74	社会医療法人 仁愛会 浦添総合病院
16	医療法人 耕仁会 札幌太田病院	75	社会福祉法人 函館厚生院 函館中央病院
17	医療法人 康清会	76	特定医療法人 修道会 本田記念病院
18	医療法人 札幌グリーン病院	77	特定医療法人 北楡会
19	医療法人 札幌西の峰病院	78	特別医療法人 明生会
20	医療法人 樹恵会 石田病院	79	特定医療法人社団 カレスサッポロ
21	医療法人 彰和会 北海道消化器科病院	80	特定医療法人社団 千寿会 三愛病院
22	医療法人 新札幌整形外科病院	81	特定・特別医療法人 函館渡辺病院
23	医療法人 仁友会 北彩都病院	82	一般社団法人 女性の健康と医療を守る医師連合
24	医療法人 仁楡会	83	総合病院 北見赤十字病院
25	医療法人 正観会 御野場病院	84	総合病院 釧路赤十字病院
26	医療法人 千隆会 岸原病院	85	総合病院 伊達赤十字病院
27	医療法人 つつみ整形外科クリニック	86	小樽循環器病院
28	医療法人 禎心会 セントラルC Iクリニック	87	太田医院
29	医療法人 糖生会 大通り内科クリニック	88	釧路泌尿器科クリニック
30	医療法人 徳洲会 札幌徳洲会病院	89	広田医院
31	医療法人 中江病院	90	学校法人 函館佐藤学園
32	医療法人 西病院	91	財団法人 基礎腫瘍学研究会
33	医療法人 ひまわり会 札幌病院	92	財団法人 協済会
34	医療法人 母恋(旧 医療法人社団 カレスアライアンス)	93	愛知株式会社 札幌営業所
35	医療法人 北海道整形外科記念病院	94	エア・ウォーター株式会社
36	医療法人 萬田記念病院	95	エフピー株式会社
37	医療法人 もみの木会 わたなべ整形外科	96	株式会社 アインファーマシーズ
38	医療法人 山田眼科	97	株式会社 アミノアップ化学
39	医療法人社団 愛心館	98	株式会社 グランビスタ ホテル&リゾート 札幌グランドホテル
40	医療法人社団 石山医院	99	株式会社 工成舎
41	医療法人社団 石山内科循環器科クリニック	100	株式会社 ジーンテクノサイエンス
42	医療法人社団 いずみ会 北星病院	101	株式会社 島津製作所 札幌支店
43	医療法人社団 いぶり腎泌尿器科クリニック	102	株式会社 ツルハホールディングズ
44	医療法人社団 栄仁会 栄通わたなべ内科	103	株式会社 フィリップスエレクトロニクスジャパン
45	医療法人社団 エス・エス・ジェイ 札幌整形循環器病院	104	株式会社 ホクドー
46	医療法人社団 慶愛会 札幌花園病院	105	株式会社 ムトウ
47	医療法人社団 恵水会 田島クリニック	106	株式会社 間組 札幌支店
48	医療法人社団 健心会 桑園病院	107	株式会社 玄米酵素
49	医療法人社団 廣仁会	108	株式会社 富士メガネ
50	医療法人社団 康仁会 中田泌尿器科病院	109	三協ラボサービス株式会社
51	医療法人社団 幸和会 くとさん外科胃腸科	110	ジーイー横河メディカルシステム株式会社
52	医療法人社団 五風会 さっぽろ香雪病院	111	スミス・アンド・ネフューエンドスコーピー株式会社
53	医療法人社団 司馬内科クリニック	112	セコム株式会社
54	医療法人社団 清水内科医院	113	戸田建設株式会社 札幌支店
55	医療法人社団 信洋会 石山病院	114	日本クレア株式会社
56	医療法人社団 信和会 石川泌尿器科	115	日本光電工業株式会社
57	医療法人社団 積信会 三村病院	116	日本製薬団体連合会
58	医療法人社団 関塚医院	117	日本メジフィジクス株式会社
59	医療法人社団 センチネルクリニック	118	日本メディカルマテリアル株式会社

119	日本メドトロニック株式会社	139	大成建設株式会社
120	富士フイルムR I ファーマ株式会社	140	池田煖房工業株式会社
121	北海道医薬品卸売商業組合	141	日本電気株式会社
122	北海道システム・サイエンス株式会社	142	柏楊印刷株式会社
123	丸水札幌中央水産株式会社	143	富士ゼロックス株式会社
124	三菱化学メディエンス株式会社	144	北海道電気工事株式会社
125	有限会社 川尻工業	145	北海道コカ・コーラボトリング株式会社
126	株式会社 アークス	146	北海道バイオシステム株式会社
127	株式会社 エスアールエル	147	北海道厚生農業協同組合連合会
128	株式会社 スクウェア・ワン	148	北海道電力株式会社
129	株式会社 ほくやく	149	北海道旅客鉄道株式会社
130	株式会社 メディカルイメージラボ	150	北海道和光純薬株式会社
131	株式会社 太陽グループ	151	第一管区海上保安本部刑事課有志一同
132	株式会社 大林組 札幌支店	152	北海道大学泌尿器科同門会
133	株式会社 竹山	153	北海道大学大学院医学研究科病態情報学講座核医学分野
134	株式会社 難波薬局	154	北海道大学医学部精神医学教室同門会
135	株式会社 日本製鋼所	155	北海道大学生協同組合
136	株式会社 北洋銀行	156	北海道大学大学院医学研究科腫瘍病理学分野
137	三笠製薬株式会社 札幌支店	157	北海道大学大学院医学研究科腎泌尿器外科学分野
138	新日本製鐵株式会社		

平成22年4月30日ご入金分まで

掲載の許可をいただいた法人・企業等のみ掲載しています。(順不同)

教員寄附者のご芳名 (平成22年4月30日現在 敬称略)

医学研究科

教授

秋田 弘俊, 浅香 正博, 有賀 正, 有川 二郎,
 石田 晋, 伊東 学, 今村 雅寛, 岩永 敏彦,
 大野 重昭, 笠原 正典, 神谷 温之, 川口 秀明,
 丸藤 哲, 岸 玲子, 久下 裕司, 小池 隆夫,
 小山 司, 近藤 哲, 櫻木 範明, 佐々木秀直,
 清水 宏, 白土 博樹, 瀬谷 司, 田中 伸哉,
 玉木 長良, 玉城 英彦, 筒井 裕之, 寺沢 浩一,
 藤堂 省, 永井 栄一, 西村 正治, 野々村克也,
 島山 鎮次, 藤田 博美, 寶金 清博, 本間 研一,
 本間 さと, 眞島 任史, 松居 喜郎, 水上 尚典,
 三浪 明男, 三輪 聡一, 武藏 学, 森本 裕二,
 安田 和則, 山本 有平, 吉岡 充弘, 渡邊 雅彦

准教授

秋山 真志, 渥美 達也, 岩崎 倫政, 岩永ひろみ,
 折館 伸彦, 神山 俊哉, 久住 一郎, 工藤 正尊,
 篠原 信雄, 鈴木 友己, 田中 淳司, 田中 真樹,
 趙 松吉, 飛驒 一利, 平野 聡, 本間 明宏,
 松本美佐子, 森松 組子, 矢部 一郎, 吉永恵一郎

講師

押海 裕之, 小野寺 伸, 北村 信人, 木下 一郎,
 近藤 英司, 齋藤 航, 澤村 淳, 志賀 哲,
 七戸 俊明, 須藤 英毅, 高野 廣子, 田島 敏広,
 古川 洋志,

助教

有田 賢, 泉 剛, 猪熊 大輔, 小山内 努,
 大塚 紀幸, 権 赫準, 加納 里志, 川畑 秀信,
 小林 純子, 清水 健太, 竹井 俊樹, 津田真寿美,
 土佐 典子, 富居 一範, 中西 一彰, 中村 利仁,
 西出 真也, 橋本 聡一, 的場光太郎, 宮崎 太輔,
 宮崎美和子, 山口 拓, 山田 俊, 吉岡 英治,
 吉田 隆行, 和田 雅子

助手

中村 秀樹, 古田 伊都子

異動者

武田 宏司

退職者

秋元 秀俊, 青山 英史, 岩崎 喜信, 遠藤 理香,
 近江谷克裕, 岡本 洋, 鐘ヶ江香久子, 川村 信明,
 櫻井恒太郎, 佐々木文章, 佐々木 了, 佐田 文宏,
 澤村 大輔, 柴田 雅彦, 末永 直樹, 高山 千利,
 田川 義継, 田中 輝明, 棚橋 祐典, 堤田 新,
 新野 正明, 西江 涉, 深谷 昌弘, 福島 菊郎,
 藤川 恵子, 古川 博之, 古田 康, 前沢 政次,
 蒔田 直昌, 松本真知子, 築瀬 晴子, 山田 秀人,
 湯浅 資之, 吉岡 成人

病院

教授

生駒 一憲, 福田 諭, 松野 吉宏

准教授

石黒 信久, 加藤 元嗣, 佐藤 直樹, 嶋村 剛,
長 和俊, 寺江 聡, 遠山 晴一

講師

阿部理一郎, 石川 岳彦, 井上 猛, 加賀基知三,
粕野 繁雄, 片岡 昭彦, 神島 保, 黒田 敏,
小谷 善久, 小山 明彦, 近藤 健, 齋藤 伸治,
佐々木 聡, 澤村 豊, 芝木 晃彦, 瀧田 恒一,
武市 紀人, 陳 進輝, 中川 伸, 中丸 裕爾,
南場 研一, 髭 修平, 樋田 泰浩, 山田 聡,
横式 尚司, 渡利 英道

助教

青柳 哲, 秋本 幸子, 石森 直樹, 伊藤 圭,
賀古 勇輝, 神津 将仁, 首藤 聡子, 秦 琢磨,
高木 大, 高橋 典彦, 寺坂 俊介, 中山 若樹,
原澤 克己, 古本 智夫, 久野健二郎, 松尾雄一郎,
三井 貴彦, 宮本 正樹, 森田 研

助手

木田 敦知

異動者

菅原 満

退職者

阿部由紀子, 安倍川智浩, 夷岡 徳彦, 蝦名 康彦,
柏村 正明, 片岡 浩, 北市 伸義, 北市 雄士,
工藤 興亮, 國原 孝, 小玉 和郎, 沢口 直弘,
椎谷 紀彦, 鈴木 温, 鈴木 章之, 鈴木 清護,
関堂 充, 高橋 将人, 高畑 雅彦, 津布久 崇,
藤堂 幸治, 中村 高士, 西 信也, 島山 博充,
原林 透, 廣瀬 茂樹, 宮坂 和男, 村下十志文,
矢野 俊介, 吉田 和彦, 渡部 琢哉

医学部保健学科

教授

石津 明洋, 小林 清一, 齋藤 健, 酒井 正春,
佐川 正, 武田 直樹, 千葉 仁志, 傳田 健三,
西岡 健, 八田 達夫, 福島 順子, 松下 通明,
松野 一彦, 三神 大世, 宮本 顯二, 村田 和香,
森山 隆則, 山本 徹, 良村 貞子

准教授

加藤千恵次, 河原田まり子, 高橋 光彦

退職者

上野 武治, 大宮司 信, 中村仁志夫, 宮本 環,
武藤眞佐子, 森下 節子

(「退職者」は、平成18年9月以降に寄附をした後退職された方)

広報室便り13

昨年度に広報室のスタッフが入れ替わりしましたが、今年度は同じメンバーで活動する予定です。毎年行っているように医学研究科/医学部医学科の概要(日本語版、英語版)や医学研究科案内の発行、医学研究科/医学部医学科ガイドDVDの改訂を予定しております。その他、今年度に予定している作業として、「北大医学部90年史」の発行および医学研究科ホームページサーバを使用している各分野・教室のホームページをセキュリティの面から独立していただくことへの支援(11月まで)などがあります。本機関紙やホームページの充実も目指しており、スタッフ一同今年度も張り切っていますので、今後ともどうぞご指導等宜しくお願い申し上げます。

(広報室長 野々村克也)

編集後記

本号は、医学研究科を支えてきた5教授が退職される寂しさと、医学部と医学研究科の新入生と新教授を迎える希望とにあふれています。また、我々の医学研究科から多数の世界1%高被引用論文が生まれていることがわかると、優秀研究賞や優秀論文賞の重みもさらに増した感じがしました。一つの節目を越え、また一步前進するような、第43号となりました。

(白土博樹)

Home Pageのご案内

医学研究科/医学部医学科広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

をご覧ください。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

goiken@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科/医学部医学科

発行 北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科
広報編集委員会

060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学系事務部総務課庶務担当

電話 011-706-5892

編集委員 田中 伸哉(委員長)、白土 博樹、
玉城 英彦、佐藤 松治

